

# 令和2年度研究推進計画

海田町立海田南小学校

校長 西岡 律子

## 1 研究主題

主体的・協働的に学び、自分の考えを深める児童の育成  
～資質・能力を育む「課題発見・解決学習」の授業づくりを通して～

## 2 主題設定の理由

### (1) 現在の教育の動向から

平成29年3月に小学校学習指導要領が告示され、新しい時代に必要となる資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された。

また、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。」（小学校学習指導要領解説 総則編P.3）と示されている。

また、「新しい学習指導要領の考え方ー中央教育審議会における議論から改訂そして実施へー（P.23）」には、以下のように記され、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点が示された。

- ・学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ・子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ・習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

### (2) 研究の経緯から

本校は、平成30年度より「主体的・協働的に学び、自分の考えを深める児童の育成」を研究主題に、生活科・総合的な学習の時間と道徳科の関連を図った、「考え、議論する」道徳科の充実を目指した研究を進め、「道徳学習プログラム」の作成、「道徳科ノート」の工夫、「考え・議論する」授業の工夫等について研究を行った。また、昨年度は海田中学校区3校で、広島県の「道徳教育改善・充実」総合対

策事業【メニュー3】「学校・家庭・地域の連携による道德教育の充実・発展」の委託を受け、家庭や地域と一体となった体験活動を行う中で、児童の自尊感情を高め、社会参加の意欲や態度など豊かな心を育てるとともに、生徒指導上の諸問題の未然防止にも資するよう、学校と家庭や地域との連携による道德教育を推進するための実践研究を行ってきた。

その結果、「自尊感情」「思いやり」「規範意識」「社会参加」のいずれの項目においても、また、児童のみならず、保護者、地域関係者、教職員全ての肯定的評価が上回るという結果が得られた。（「道德教育改善・充実総合対策事業」質問紙調査結果 5月と12月の比較より）中でも「社会参加」の項目の伸びが高く、特に教職員の伸びが大きかった。その要因として、総合的な学習の時間や生活科と関連を図った道德学習プログラムが充実したことが挙げられる。

積極的に地域学習を取り入れたり、地域に向け発信してきたことにより、児童自身が「地域のことをもっと知りたい。地域のために何かしたい。地域の行事に進んで参加したい。」という意識が高まったことによると考える。また、そうした児童の活動に対して保護者や地域住民に協力を仰いだことにより、結果として認知度や関心が高まったと考えられる。

しかしながらアンケートを細かく見てみると、「自分のよさは、まわりの人から認められていると思う。」という質問においては、肯定的に回答した児童は全体として減少し、児童が自己実現できる場を増やしながら、賞賛される場面を意図的に計画する必要があることも分かった。

また、発問の特徴についての分析と発問の工夫を行うために、発問分析表を用いたことは、教師の既成概念を破った発問を考える大きな手掛かりとなった。しかし、授業研究を重ねる中で、発問の精選が大変難しく、今後さらに研究を深める必要があることを感じている。

### (3) 実態分析の結果から

昨年度末に行ったSWOT分析では、本校児童は決められたことは真面目に取り組み、よく働くことができ、困っている人や下級生に対し親切に行動できるというよさがあるものの、周りに流されやすく、主体的に行動することが難しいという実態が明らかになった。基礎学力が定着していない児童がいることや、自信をもって活動することができない児童がいる。また、ボランティア活動に熱心な地域住民や教育熱心な保護者がいる一方、つながりが薄く多忙な保護者も多いなど、児童を取り巻く家庭環境が二極化している実態がある。そこで、保護者との連携を図っていくことや保護者を巻き込んだ教育活動を展開していくことが必要である。

これらのことから、本校児童に身に付けたい資質・能力は、「深く考える力」「課題を発見・解決する力」「自己を正しく理解する力」と設定した。

### (4) 私たちが目指すべき授業像

本年度も「道德教育改善・充実」総合対策事業【メニュー3】「学校・家庭・地域の連携による道德教育の充実・発展」の委託を受けることとなった。これは、家庭や地域と一体となった体験活動を行う中で、児童の自尊感情を高め、社会参加の意欲や態度など豊かな心を育てるとともに、生徒指導上の諸問題の未然防止にも資するよう、学校と家庭や地域との連携による道德教育を推進するための実践研究を行うものである。

さらに、主体的・対話的で深い学びの実現を目指すために、研究教科を道德科と算数科とする。令和元年度に実施した全国学力学習状況調査によると、国語科ではどの領域・観点においても平均正答率が全国平均を上回る状況であったが、算数科においては、図形領域、知識・理解の観点において全

国平均を下回っていた。また、CRT 標準学力調査の結果では、活用する力を見取る問題や思考・判断・表現する力を見取る問題において課題があることが明らかになった。

そこで、これからの時代を生き抜く児童にとって、予測困難な場面や状況を理解して自ら目的を設定し、その目的に応じて必要な情報を見だし、情報を基に深く理解して自分の考えをまとめたり、相手にふさわしい表現を工夫したり、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見だししていく力を道徳科と算数科を切り口にして開いていきたい。

そこで本年度は、次のような授業づくりに取り組みたい。

#### 【道徳科】

- 児童一人一人が自分事として捉え、道徳的価値を基に自己を見つめることのできる授業
- 児童が多様な考えを交流し、主体的に考えることのできる道徳科の授業の充実
- 家庭・地域と一体となった体験活動との関連を図り自己肯定感を高める道徳科の授業の充実

#### 【算数科】

- 生活の中から算数の問題を見出し、その課題解決に向けて児童が主体的に取り組むことができる授業
- 児童同士が多様な考えを交流し、考えを深めたり、広げたり、異なる場面（他の単元・生活）での活用について考察したりできる授業
- 学びを生活に生かそうという意欲をもつことのできる授業

### 3 研究仮説

#### 【道徳科】

家庭や地域と一体となった体験活動を含む「道徳学習プログラム」の充実を図りながら、道徳科の授業における発問を工夫すれば、児童の多面的・多角的な思考と価値観への気づきを促すことができるであろう。

#### 【算数科】

主体的に問題解決に取り組むことのできる問題提示や、児童が深い学びをするための練り上げの場における発問の工夫をすれば、生活の中から算数の問題を見出してその課題解決に向けて主体的に取り組み、自分の考えを深めることができるであろう。

#### (1) 道徳科について

##### ① 「児童の多面的・多角的な思考」とは

道徳科では、1つの事柄について見る立場を変えたり、多くの人の見方を生かしたりして、対比して掘り下げていたり、あるいは1つの事柄についての自分の考えや生き方の選択肢を主張し合ったり、話し合ったりして、より明確化していきたりするなど、多様な見方による思考への発展が重視される。

例えば「いじめ」をテーマとした教材を扱うとき、「いじめる側」「いじめられる側」「傍観者」など様々な立場で捉えさせることにより、児童の考えは多様さを増す。例えば「命の尊さ」について考えるとき、「命のつながり」「命に限りがあること」「命が存在することの偶然性」など「命」について様々な面から捉えることにより、「命は尊い」という児童の考えは多様さを増す。他にも、「諦めてしまいたくなるような心の弱さと、こんな自分になりたいという心の強さ」のように相対する気持ちの

存在について考えることにより、自分の考えの多様さに気付くこともある。

このように、俯瞰してみたり、近寄って見たり、今の時点で見たり、時間を置いてみたりする中で、正面から見た考え、側面や背面から見た考え、合わせていく考えや比較する考え、個で考えたり、周りとの関係からの考えなど、多様な考え方が、質の高い学びを生み出すと考える。

## ② 「価値観への気付き」とは

「価値」と「価値観」の捉え方を次のように整理する。学習指導要領 道徳科の目標には、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」と記されている。永田繁雄元調査官は目標が示す学びの姿を図1のように示した上で、「価値」と「価値観」は違うとし、次のように述べている。（道徳教育 2018年11月号（明治図書）「新・道徳授業論」連載第8回）

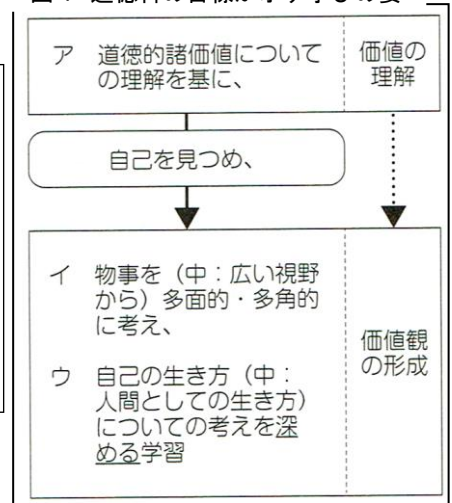
理解が前提となった「価値」といわゆる「価値観」とは明確に違うということだ。…（中略）「価値」は教師が教え、子どもが考えるべき対象として客観的にあるものであり、その理解のためには時に共通の押さえどころがある。その学びは「深い学び」というよりも「基盤となる学び」というべきものになる。一方、「価値観」は子ども一人一人に内在しているものであり、個別的・個性的なものであって誰一人同じものはない。」

例えば、「友情、信頼」について考える学習において、「仲良くし、困ったときは親切にすることが友情だ。」と思っている児童が、資料を通して「時には言いにくいことであっても、友達のために思って注意し合い助け合うこともまた友情である。」と、これまで抱いていた「友情、信頼」に対する認識より、広がりのある理解をしたとする。これが永田氏の言うところの「共通の押さえどころ」であり、教師がねらいとする価値であり、児童が理解した「価値」であると考えられる。しかし、児童のこうした理解がここでとどまるだけでは不十分である。道徳科の授業では、一人一人生活経験や学習経験が異なり、これまで培ってきた価値観の異なる児童が、自分事として捉え、自分なりの価値観を広げたり、深めたりすることが大切である。先の例で言えば例えば、「みんなが言うように注意し合えることも大切だということはよく分かるけれど、自分だったら本当にそれができるか、とても迷った。でも、そんな友達同士になれたらすてきだなと思う。」と考える児童がいるかもしれない。またある児童は「友達に注意するなんて、今の自分には難しい。友達に嫌われそうで怖い。だけど、いつか勇気を出して友達のことを思った注意ができるような自分になりたい。」と思うかもしれない。こうした、一人一人の中に育まれる個別・個性的な、自分の心のフィルターを通して児童それぞれが大切にしたいという思いを「価値観」と捉えることにする。こうした「価値観」は当然ながら教師によって押しつけられるような性格のものではない。また、学級に共通の答えのようなものでもないと言える。

## ③ 「発問の工夫」とは

全ての授業において、教師の発問が重要であることは言うまでもない。道徳科においても、教師の発問の良し悪しが授業を大きく左右する。

図1 道徳科の目標が示す学びの姿



(1) で述べたような「多面的・多角的な思考」は、子ども同士の協働、教職員や地域の人などとの対話、先哲の考え方を手掛かりにした対話など、自分と異なる意見と向かい合い議論したりする中で（「対話的な学び」）促されるものであるが、どのような内容をどのような方法で促すかは、教師の発問に寄るところが大きい。例えば、物語の各場面について「～の時、主人公の気持ちはどうだろう。」「～の場面の時は、どのように気持ちが変化しただろう。」といった時系列に考えさせる場面発問ばかり繰り返しても、問題の追求にはならない。

また、(2) で述べたような「価値観への気付き」を促すためにも、教師の発問は重要である。例えば終末で毎時間「これから頑張りたいこと」を安易に語らせたり、「今日の学習のふりかえりを書きましょう。」と単に投げかけたりすることは、児童が教師の期待を押し量って語ろうとする傾向を強めたり、児童の問題意識を生かす問題追及の流れとは異なる展開になる。

そこで、各学習過程における発問の意図や留意点について整理し、どのような発問をするのかについて考えていきたい。

## (2) 算数科について

### ① 主体的に問題解決に取り組むことのできる問題提示の工夫とは

中央教育審議会答申では、資質・能力が育成されるために、「事象を数理的にとらえ、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決し、解決過程を振り返って概念を形成したり体系化したりする過程」といった算数・数学の問題発見・解決の過程が重要であるとしている。また「学習指導要領解説 算数編」では、『日常生活や社会の事象を数理的にとらえ、数学的に表現・処理し、問題を解決する、という問題解決の過程』と、『数学の事象について統合的・発展的に捉えて新たな問題を設定し、数学的に処理し、問題を解決し、解決過程を振り返って概念を形成したり体系化したりする、という問題解決の過程』の、二つの過程が相互に関わり合って展開するとしている。

また、「学習指導要領解説 算数編」では、基礎的・基本的な内容を習得する際に、「その背景にある概念や性質についての理解を深めながら、概念や性質の理解に裏付けられた確かな知識及び技能を習得する必要がある」としている。実際の問題を解決する際に的確かつ能率的に用いることができ初めてその真価が発揮されるというのである。

そこで、児童にとって身近な日常や社会における事象から算数の問題を見出し、主体的に解決していくことを大切にしたり、「 $2 \times 9$ を表すのはどの場面（図）か説明しよう」などと、式等から日常の事象に目を向けるなどの算数の学習内容を視点に日常の事象へ広げたりし、問題提示の工夫をしていきたい。このように、日常生活から算数の問題を見出す過程と数学の事象から新たな問題を設定する過程の2つの過程を意図的に仕組み、問題提示の工夫をしていくことで、児童が主体的に問題解決に取り組むことができるようになると思う。

### ② 深い学びを実現するための練り上げの場における発問の工夫とは

「深い学び」とは、先述したように、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりする学びである。そのような深い学びは、算数科では主に、「練り上げの場」で数・図（具体・抽象）・式・表・言葉などの表現の置き換えや関連づけをしていくことにより育まれると考える。

練り上げの場は、①自力解決の場における練り上げ②小集団解決の場における練り上げ③集団解決の場における練り上げ④振り返りの場における練り上げが挙げられる。その中でも、特に集団解決の

場における練り上げに焦点を当てて、どのような発問により、図・式・表・言葉等のどのような表現で考えを交流し、最終的にどのような児童の姿を求めていくのかを明らかにしていく。

## 5 研究内容

### (1) 道徳科

#### ① 発問の特徴についての分析と発問の工夫

昨年度使用した「発問分析表」は、発問計画を立てる際に大変有効であったという成果を得ることができた。例えば、【A共感的な発問】だけが続く授業にならないよう意図的に配慮したり、もしも【B分析的な発問】ならば、【C投影的な発問】、【D批判的な発問】ならば、どのような発問になるだろうかと考えることにより、教師の既成概念を破った発問を考えたりすることができた。

しかし、発問について、新たな次のような課題も明らかになった。

- ・ねらいに迫る発問の焦点化が難しい。
- ・児童の発言が同じような多様性に欠ける内容になってしまう。
- ・教師の発問に対し、特定の児童が発言する授業になってしまったり、児童同士の発言が繋がらず、教師対児童のやりとりに終始してしまったりすることがあった。
- ・自分事として深く考える発問をすることが難しかった。
- ・【D批判的な発問】が重要な役割を果たす場合が多いと感じているが、どのように問うかは、児童実態の把握の深さや、教師の力量に係る部分が大きく、その要因について明確に分析する必要がある。

そこで

ア 児童が問題意識をもつことができる発問

イ 児童が主題や道徳的価値に着目することができる発問

ウ 児童が自分を内省し、学びを振り返ることができる発問

について重点を置き、発問の工夫を行う。

#### ア「児童が問題意識をもつことができる発問」とは

この発問は、授業の導入部分に深く関係する発問である。これまでの授業の導入では、アンケート結果や児童の生活の様子を振り返ることなどにより、ねらいとする価値の方向付けを行い、教材を読むスタイルが多く見られた。その中で課題となったのは、教師が学ばせたいと思っている主題と児童の問題意識にズレがあったり、あるいはズレはないにしてもそれほど児童が問題意識を感じていなかったりするという状況である。児童が、自分事として捉え考える授業にするためには、児童自身が問題意識をもつことができるようにすることが必要で、子ども自身から問いを生み出させるようにすることが重要になってくる。「子どもの問題意識」と「教師が学ばせたい主題」との重なりが大きくなればなるほど、学習テーマは鮮明になり、子どもの学習意欲は高まっていく。

そこで例えば、あらかじめ目的意識をもって道徳の授業に臨んだり、教材を読んだ後に、「登場人物〇〇の～な行動が気になりました。」「〇〇についてみんなで考えたいと思いました。」などと児童が意識を高めたりすることができる発問の工夫をすることが考えられる。

また、価値の方向付けをせずに、教材の内容についての関心を高める等の導入の方法もある。ねらいや実態を考慮して、児童の中から関心を引き出す発問について吟味したい。

### イ「児童が主題や道徳的価値に着目することができる発問」とは

この発問は、授業の展開部分に深く関係する発問である。昨年度の研究では、「～の時、〇〇はどんな気持ちだっただろう。」「～の場面では、〇〇はどう思っただろう。」といった時系列に心情を考えるような【A共感的な発問】だけで授業を構成すると、国語的な読み取りになりがちで、主題に向かい深く考えることができないので、【A共感的な発問】だけが続かないように配慮してきた。本年度は、教材のもつ問題「～にはどんな意味があるのか」「〇〇がそうしたのとはなぜだろう。」といった【B分析的な発問】や「〇〇がしたことをどう思うか」「〇〇は本当にそうしてよいのか」といった【D批判的な発問】の質について吟味し、児童が道徳的価値に着目して追求することができるようにする。こうした発問のことを本校では「**テーマ発問**」と呼ぶことにする。

この「テーマ発問」が、しっかりと教材分析から導き出され、児童の意識と実態にピッタリと合ったものであれば、協同的な話し合いや言語活動を生かした議論を自然と助長すると考える。つまり、よい「テーマ発問」は、児童が自ずと話したくなったり他者の考えを聞きたくなったりするもので「対話的な学び」を実現することにも繋がる。教師が細かい発問を繰り返さなくても、児童同士が質問し合ったり、発言の共通点や相違点を紡ぎ合ったりして、すなわち互いに学び合うことを通して、道徳的な価値や生き方について深められるようにすることを目指すものである。

### ウ「児童が自分を内省し、学びを振り返ることができる発問」とは

この発問は、授業の展開後段から終末部分に深く関係する発問である。展開後段の「見つめる」の学習過程においては、教材等の学習を基に、自分の生き方を振り返る段階である。ここでは、日常生活に目を向けさせたり、今までの自分を見つめさせたり、これからの生き方につなげて考えさせたりする発問の工夫が必要になる。

また、終末の「あたためる」の学習過程では、道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の生き方につなげる段階である。そこで、教師の説話のみならず、本時のまとめを児童自身が行ったり、感想を発表したり様々な学習の工夫とともに発問を考えていく。

## ② 家庭・地域と一体となった体験活動を含む「道徳学習プログラム」のブラッシュアップ

本校は一昨年度より、カリキュラムマネジメントの考えに基づき、全学年が「道徳学習プログラム」を作成し実践している。「道徳学習プログラム」とは、体験活動と道徳科の授業を関連させ、道徳科の授業において、児童が自分とのかかわりで道徳的価値のよさを実感し、道徳的価値の自覚を深め、その後自発的、自律的な道徳的実践（道徳科の学習が実生活で生かされる実践）ができるようにするプログラムのことである。昨年度は、一昨年度に作成した「道徳学習プログラム」の改善や、新たなプログラムの作成等、児童一人一人が自分事として捉え、自分なりの価値観を培うことのできるプログラムになるようブラッシュアップを行ってきた。

過年度より取り組んでいる「心の元気プロジェクト」や学校行事、各学年の総合的な学習など様々な体験学習と道徳科の授業を結び付け、それぞれの体験や学習のつながりと効果について、指導案にも明記した。

その結果、次のような家庭・地域との連携の仕方が見られた。

- 生命尊重や家族愛の内容項目で、まさに内容が家庭と密接に関連した内容で、手紙等協力を依頼した家庭との連携。
- 感謝や勤労・公共の精神等の内容項目で、内容が地域と密接に関連した授業内容で、地域の方の話を道徳学習プログラムに組み込んだり、ビデオレターなどで紹介したりした地域との連携。
- 直接内容的に関連があるわけではないその他の内容項目（例えば友情・信頼）で、保護者の価値観を手紙等で知ることを教材化した、家庭との連携。

また、次のような成果を得ることができた。

#### 【成果】

- どの学年も昨年度の道徳学習プログラムを実態に合わせ、ブラッシュアップを図ることができただけでなく、新しい道徳学習プログラムを作成し、複数のプログラムに取り組むことができた学年もある。

- 「道徳教育改善・充実総合対策事業」質問紙調査結果より

本質問紙調査は、保護者は自分の子どもについて、地域関係者は地域の子どものことについて、教職員は自校の児童について、「自尊感情」「思いやり」「規範意識」「社会参加」に係る12項目と、中学校区設定の2項目の計14項目について本年度5月と12月に調査したものであり、その肯定的評価を比較すると、次のような結果が得られた。

「自尊感情」「思いやり」「規範意識」「社会参加」のいずれの項目においても、また、児童のみならず、保護者、地域関係者、教職員全ての肯定的評価が、5月より12月が上回っているという結果が出た。

中でも「社会参加」の項目の伸びが高く、「社会参加」の3項目の伸びを合計すると、児童12ポイント、保護者27ポイント、地域関係者28ポイント、教職員67ポイントであった。特に教職員の伸びが大きい要因として、総合的な学習の時間や生活科と関連を図った道徳学習プログラムが充実したことが挙げられる。

3年生は「やさしさ発見・とどけ隊」の学習において地域の自慢を探し、マップを作成する活動を行い、福祉の学習を核として、老人ホームとの交流を行ってきた。4年生は、防災の学習を中心としながら本校児童のみならず、保護者や地域関係者に対する発信を行ってきた。5年生は、「南小校区お宝発掘し隊」の学習で、校区に残る伝統や文化財などを調査し、保護者や地域関係者に積極的に発信してきた。また、6年生は、「ぼくの夢 わたしの夢」の学習において、身近な人物である家族や地域の卒業生に話を聞くことで、自分事として捉え、職業観を広げることにつながった。1・2年生の生活科の学習においても体験と結びついた学習がどの単元にもあり、道徳学習プログラムとしっかりと結びついている。積極的に地域学習を取り入れたり、地域に向け発信してきたりしたことにより、児童自身が「地域のことをもっと知りたい。地域のために何かしたい。地域の行事に進んで参加したい。」という意識が高まったことによると考える。また、そうした児童の活動に対して保護者や地域住民に協力を仰いだことにより、結果として認知度や関心が高まったと考えられる。

しかしながら、次のような課題も見られた。



### 【課題】

- 道徳学習プログラムの全てが、有機的に結びついているわけではない。児童自身がその結びつきを意識化できるよう、プログラムを見直すとともに、可視化するなど工夫が必要である。道徳学習プログラムと有機的に結びついていることが実感できるものについて、その要因を明確にし、道徳学習シートへのコメントの書き込み、毎日の生活の中に道徳の学びをちりばめる努力等、日々の道徳教育の充実も図っていききたい。
- アンケート結果より、児童の自尊感情に係る項目で、「自分のよさは、まわりの人から認められていると思う」の結果が思うように伸びていない。児童が自己実現できる場を増やししながら、賞賛される場面を意図的に計画する必要がある。

そこで昨年度に引き続き本年度も、家庭・地域と一体となった体験活動を含む「道徳学習プログラム」(図2)のブラッシュアップを行うが、その際の視点として「道徳学習プログラム」の有機的な結びつきに重点を置く。これまで繋げてきた道徳科の授業と体験活動を含む各教科・領域の学習が児童自身の意識に根付き、道徳学習プログラムのねらいに向かうものにするということである。

具体的には、図1に示した通り、次の3点に留意しながらブラッシュアップを行う。

また、これまで使用してきた児童用シートは、保護者との連携が分かりにくいものであった。そこで、学校での学びが家庭へ繋がり、さらに家庭での学びが学校で繋がっていく循環が可視化できるように、児童用シートや道徳科ノートに保護者からのコメント欄を設けるなどの工夫をする。教師は一人一人の感じ方・考え方を肯定的に評価しコメントを記すようにする。この工夫は、児童の自己肯定感を高めることにも繋がると考える。授業の中では全員に言葉を返すことは難しい。また、授業中見とることが出来なかった児童一人一人に向き合い、言葉を返すことで、児童は自分を認めてくれていることに安心感をもつであろう。また、保護者は学校での学習の姿を知ることにより、児童の成長を認め賞賛することができる。こうした積み重ねが、児童の自己肯定感を高めていくことになると思う。

図2 道徳学習プログラム

令和元年度 第4学年 道徳学習プログラム	
自分や仲間力を磨いて、響け ハーモニー!	
ねらい	お互いの個性を認め合い、信頼し助け合って共に伸びていこうとする態度を養う
児童の意識の流れ	各教科・領域と道徳科との関連
① 言葉の大切さを考えて「言葉の大切さ」を学ぶ。	① 養育「今日の花」 【学級活動における道徳教育の視点】 言葉の大切さやよさを見つけて、認め合うことができる。
② クラスのみならず、学校全体や地域の人々を大切にすることを考える。	② 学級活動「信じて」 【学級活動における道徳教育の視点】 信じての大切さを、仕事の内容、分限など、クラスのことを考えて活動内容を改善しようとしている。
③ 相手の立場を考えて行動し、思いやりを表現できるように育てる。	③ 道徳科「ゆずきの心配」 B(6)【親切、思いやり】 一歩一歩に気を遣いながら、校庭の隅で静かに手を打つことと相手の気持ちをわかってゆずきの心配をすることを通して、相手の置かれている状況や気持ちを考え、声掛けしようとする心を育てる。
④ 仲間だけでなく、様々な人の意見や考え方を尊重し、協力し合いながらプレーする力を身につける。	④ 体育科「スポーツ」 【体育科における道徳教育の視点】 友達と協力し合い、みんなが楽しくゲームすることができる。
⑤ 相手のことを考えて行動し、思いやりを表現できるように育てる。	⑤ 道徳科「ぼくらだっどオーケストラ」 【本時】 B(9)【友情、信頼】 市の音楽会に向けて、練習を重ねてつなぐ心をつなげることを通して、友達と互いに理解し助け合おうとする心を育てる。
⑥ 友達と力を合わせて、力を合わせながら、力を合わせることを学ぶ。	⑥ 学校行事「歌声コンサート」 【学校行事における道徳教育の視点】 歌声が響き合う中、心を繋ぎ、友達と心をつなげて歌う成長した姿を、地域の人や保護者に見せることができる。

ねらい お互いの個性を認め合い、信頼し助け合って共に伸びていこう!

① 道徳学習プログラムのねらいやゴールの児童の姿が、本年度の児童の実態に即した必然性のあるものになっているか。

② 道徳学習プログラムの期間は、児童の意識の継続が図られる適切な期間になっているか。

③ カリキュラムマネジメントの考えに基づき、教科・領域の学習や体験活動が、適切な配列になっているか。

自分や仲間力を信じて、届け ハーモニー！ 友だちをみため、懐かしい、きょうかし合って、ともに成長していますか？		
クラスのみなが楽しく学校生活を送るための活動計画を掲載せう。	学級活動「係活動」	どんなことに喜びましたか。
先月のまことさんの行動をどう思いましたか。	道徳科 (10/ ) 「ゆき心の心算」	
体育科「ボートボール」	ボートボールの学習から学んだことは何ですか。	
好きな道徳科は、どんな瞬間に思いましたか。	道徳科 (10/29) 「ぼくらだってオーケストラ」	あつちの友誼エピソードを聞いてどう思いましたか。
どんな子どもを尊敬しましたか。	特別活動 (11/13) 「実習科の学校子ども会」	子ども会参加を通してどう思いましたか。
友だちをみため、懐かしい、きょうかし合って、ともに成長しよう！		

児童用シートや道徳科ノートに保護者からのコメント欄を設けるなどして、家庭との連携が見えるように工夫する。

教師は、一人一人の感じ方・考え方を肯定的に評価しコメントを記す。

学校全体の道徳科内容項目の重点を「希望と勇気、努力と強い意志」「勤労、公共の精神」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」「生命の尊さ」と設定する。各学年の実態に応じ、この中から最重点項目を1または2項目設定し、研究を進める。(様式1)

指導案形式については、別紙の通りである。

### ③ 道徳科学習の環境整備

#### ア 道徳科ノート

児童が授業で使う「道徳科ノート」を作成する。昨年度はA4ノートに統一し、直接記入したりワークシートを貼付したりして使用し、使い方は自由とした。ワークシートを貼付する学年が多く、かなりの重量があって持ち運びに不便であったため、本年度はB5ノートに統一することとする。書く活動は言語活動なので、書くことにより、思考を深めることが出来る。また、教師にとっては、一人一人の子どもが何を考えているのを見取りやすくなる。そして意図的な指名を行うことができる。書く活動のメリットである。一方、書く活動は時間がかかるというデメリットもある。しっかりと時間を確保して書かせるためには、1単位あたり1度か2度より多く書く活動を取り入れることは難しい。また、深く考えるということは、逆に言うと自分が書いたことから離れにくくなるので、手元のノートから児童の視点に移すことも必要な場合もある。

このようなメリット、デメリットを考えながら、学級の実態に応じて、何のために書かせるのかをしっかりと意識し、ノートに書かせることを精選する工夫をしていく。なお昨年度のノートの見本はイに示すカリキュラムボックス内に蓄積されている。

#### イ 道徳科カリキュラムボックス

図3に示す、道徳科カリキュラムボックスは、昨年度より全学年、内容項目ごとに引き出しを設け、使用した指導案や板書の写真、資料などをストックした。本年度もこの取組を継続して行い、次年度の授業者の参考になるようにする。

図3 カリキュラムボックス



## (2)算数科

### ① 主体的に問題解決に取り組むことのできる問題提示の工夫

ア 日常や社会における事象から算数の問題を見出す過程を大切にされた問題提示

児童の実態から、問題の表現や提示の仕方を工夫し、児童自ら「どうしてそうなるのだろう。」  
「調べてみないと分からない。」「どんなきまりがあるのかな。」などと、問題場面から問いを見出し、解決しようとするところができるようにする。

イ 算数の学習内容を視点とした問題提示

「 $2 \times 9$ を表すのはどの場面(図)か説明しよう」「一の位と十の位の数字を入れ替えて計算しても、積が等しくなる2桁 $\times$ 2桁の計算について説明しよう」などと、算数の学習内容(数のきまりの美しさ・不思議さ・規則性・事象の比較・条件不足・条件過多)等の問題提示の工夫により学習をスタートさせることで、児童が主体的に問題に取り組むことができるようにする。また、そこから見つけたり身に着けたりした知識及び技能を、図や言葉等により表現することで日常や社会における事象に適用させることができるようにする。

### ② 深い学びを実現するための練り上げの場における発問の工夫

練り上げの場では、何のために考えを交流していくのか明確にしておく必要がある。その方向性について、5つ挙げられる。

ア 複数の見方・考え方の類似点・共通点について比較・検討(一般性)

イ 個々の見方・考え方の工夫している点について比較・検討(能率性・簡潔性・正確性)

ウ 異なる場面(発展的な場面)での活用について考察(発展性, 一般性)

エ 現実の生活への活用について考察(能率性・簡潔性)

オ 状況に適した見方・考え方を選択(能率性・簡潔性)

これらの練り上げの方向性を、学習内容に応じて明確にし、その方向性に応じた発問を工夫していく。またその際に、数・式・図(具体・抽象)・表・言葉等の表現様式を行きする視点も大切にしながら次のように整理していく。

#### 練り上げの方向性と発問一覧

ア 複数の見方・考え方の類似点・共通点について比較・検討(一般性)

「まとめて言えないか。」

「前に分かっていることで、これと同じに見られるものはないか。(他の表現で)」

イ 個々の見方・考え方の工夫している点について比較・検討(能率性・簡潔性・正確性)

「もっとよい方法はないか。もっとよく、簡単にできないか。(式をまとめると)」

「まとめてすっきりできないか。(式で表すと)」

ウ 異なる場面(発展的な場面)での活用について考察(発展性, 一般性)

「違った見方はできないか。」

「条件を変えたらどうなるか。」

エ 現実の生活への活用について考察(能率性・簡潔性)

「式からどんな問題が作れるか。」

「このような式の関係は、身の回りにないか。」

オ 状況に適した見方・考え方を選択(能率性・簡潔性)

「条件をどうかえられるか。」

### ③ 日常の問題から算数の問題へ見出す視点を育てる環境整備

「算数コーナー」を設置し、日常生活や社会の事象を数理的にとらえ、解決する算数の問題を定期的に提示し、日常の問題から算数の問題へ見出す視点や数学的な見方・考え方を学習場面だけでなく、普段の生活の中で育むことができるようにする。

また、算数コーナーの問題を教員が作成していくことで、日常の問題から算数の問題を見出す教材研究もできるようにする。

## 6 研究方法

### (1) 理論研修

後日提案

### (2) 授業研究

校内授業研究【道徳（1学期）又は算数（1・2学期）各学年1回】を実施する。授業実践を参観又は動画撮影し、協議の柱に沿って授業分析を行うことで、研究主題に迫る授業づくりをする。

なお、道徳科の校内授業研究は、広島県「道徳教育改善・充実」総合対策事業【メニュー3】を兼ねており、海田中学校区の海田中学校、海田東小学校教職員も参加予定である。

12月16日（水）は、広島県道徳授業公開が本校で開催され、道徳科の授業を2本公開する。

その他研修日程の詳細については研修計画を参照のこと。

#### 協議の柱（道徳科の授業）

柱1 家庭や地域と一体となった体験活動との関連を図った「道徳学習プログラム」の工夫は、どうだったか。

柱2 児童の多面的・多角的な思考と価値観への気づきを促すための教師の発問の工夫はどうだったか。

#### 協議の柱（算数科の授業）

柱1 児童が深い学びをするための教師の発問の工夫はどうだったか。

柱2 「課題発見・解決学習」の問題提示はどうだったか。

- ・学年で道徳科または算数科の指導案を一本以上作成して授業研究を行い、ホームページに掲載する。
- ・**授業の2カ月前に指導案作成に向けた校内研修を実施し、授業2週間前までに決済を受けた指導案を**研究主任へ提出する。期日を厳守するためにも、早めに起案すること。
- ・授業は、動画撮影しておき、校内研修で授業分析・検証を行う。授業記録（動画撮影・発話記録）は学年部で、協議会の司会、記録、会場準備は教務部で行う。
- ・記録者は協議会終了後、授業記録及び協議会記録をデータ保存する。  
【保存先：share⇒04 研究⇒授業動画フォルダ】
- ・授業者以外の学年部員で授業研究終了後、成果と課題を踏まえた改訂版指導案を作成し、提出する。  
（様式については、別途提案する。）
- ・初任者研修の示範授業等と兼ねることができる。

## 7 検証計画

### (1) 道徳科

#### ① 研究授業の検証

柱1の検証方法・・・児童の発言や、道徳科ノート等の記述

- ・「道徳学習プログラム」の体験が、児童の意識と有機的に結びつき、実践の場が確保されたものになっているか、児童の発言や、道徳科ノート、特に「学習シート」の記述から検証し、年度内により良いものに改善する。

柱2の検証方法・・・児童の発言や、道徳科ノート等の記述

- ・児童の発言や様子を記録として残し、教師の発問がどのような影響を与えるか分析し、振り返りに生かす。
- ・児童の道徳科ノートの記述内容から、児童の価値観への気付きを知る手がかりとする。

## ②児童及び教職員の意識調査の実施と分析

- ・年2回のアンケート（5月、12月）を実施し、教務部が分析する。

## (2) 算数科

### ○研究授業の検証

柱1の検証方法・・・児童の発言や、課題解決の様子、ノート等の記述

- ・「課題発見・解決学習」の単元構成や問題の提示の工夫により、生活の中から算数の問題を見出し、その課題解決に向けて児童が主体的に取り組むことができるものになっていたか、児童の発言や、課題解決の様子、ノート等の記述を基に検証し、改善版の指導案を作成する。

柱2の検証方法・・・児童の発言、板書

- ・指導案に明記してある交流場面の目的と、実際の交流場面の内容はどうだったか、児童の発言・板書を基に検証する。

## 8 研究組織

